

郷土館発 石神仏の受難

名古屋市の博物館が、来年度奥三河のくらしをテーマに特別展を計画している。担当する学芸員の方が先日郷土館を訪れた特別展にむけた調査のためである。その方の話では、あるところで、塞の神等の石神仏について、存在場所を紹介しないほしいと言われたそうである。人通りの少ない古い街道沿いにひっそりとたたずむ石神仏を心無い人が持つていってしまうことを恐れている。



後ろ向きに立つ馬頭観音碑

三都橋の旧作手街道沿いに五体の馬頭観音像や三十三観音巡礼塔それに田峰観音と岡崎方面を示す道標がたっていた。(設楽町文化財専門委員活動報告No.8による)ところが、今、その場所に行ってみると、馬頭観音の碑が一基、それも後ろ向きに立て



いのししに倒された石仏

られているのみである。近くの方に尋ねてみても、「さあ、そんな像があったのかね。」という返事である。

何百年もの間、道ばたにたたずみ、人々を見守ってきた石神仏が各所でさまざまな災厄を受けている。近年拡大しているいのししによる被害もその一つである。

設楽ダムの水没予定地区では多くの家庭が既に転居をした。先日、山ノ神が祀られていた場所に行ってみると無いので、たまたま近くで仕事をしておられた方に尋ねてみると、それは我家で祀ってきたものなので、立退きに合わせて移動させたということであった。先祖が大切に祀ってきたものをこうして尊重し、自ら祀っていかうとする心は大切である。しかし、長年

の間に林間に放置され風化していく石神仏も数多くある。

石仏公苑は、昭和四十七年に石神仏の収集保護を目的につくられたものである。郷土館のなかにも、何体かの石神仏が納められ、展示物として皆さんの目に触れられるようになっていく。その石神仏一体一体は、元来それぞれの意味をもってそこに立てられたのである。その時代の歴史や暮らしを紐解く貴重な文化遺産であると同時に、そこに暮らした人々の祀る心を引き継ぐ神仏として、あるべきところにあるというのが本来の姿であろう。

私たちや祖先を守ってくれた石神仏を私たちがどう守っていくかが課題となっている。



林間にひっそりとたたずむ石仏

(奥三河郷土館

館長 平松 博久)